

## 本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2021 林 少陽



# 清末中国のある思想家の憂鬱

章炳麟(1869–1936)の「進化」論批判  
(東アジア藝文書院講義 第十講)

- 1911年の中国の辛亥革命／清末革命は帝政を終えた革命として知られているが、十年以上も続けられたこの革命はその海外基地が東京であった。
- この革命の理論家として、そして清末の碩学として章炳麟(章太炎、1869 – 1936)がいる。
- 1910年代の東京は一時期とは言え、1910年の「大逆事件」前まではアジアの革命者の中心地・根拠地でもあった。



PUBLIC  
DOMAIN



生先炎太章杭餘

Mr. CHONG TAI YIM, YE HONG, CHINA.

PUBLIC  
DOMAIN

# 章炳麟：日本との関係が深い革命家

- はじめ康有為（一八五八～一九二七）に賛同して變法派（改良派）に属したが、のちに反清革命派に転じた。
- 光緒帝（一八七一～一九〇八）を貶し革命の宣伝で一九〇三年六月から一九〇六年六月まで三年間入獄。
- 一九〇六年六月二十九日に、出獄したばかりの彼は、革命のリーダーである孫文、黃克強の派遣した代表で章を海外革命基地である東京に迎えた。
- 古典学（特に諸子学、漢字学）の集大成者としても知られている。辛亥革命の理論家・宣伝家としてその影響が大きい。
- 「数えてみれば、戊戌（1898年、政変）の年からすでに七回搜查され、六度とも捕まらなかつたが、七度目になつてはじめ逮捕された」（西他訳）

——1906年6月29日上海の租界の監獄から出獄した章炳麟は日本に渡り、7月15日、東京神田で開かれた留学生の歓迎会において演説。

# 章炳麟集

清末の民族革命思想

西順藏・近藤邦康編訳



19世紀末から20世紀初めにかけて中国で民族革命を鼓吹し、孫文・黃興とならんで「革命三尊」と呼ばれた思想家章炳麟(1869 - 1936)の主要論文24篇を収録。佛教と老莊の思想にもとづいて西欧思想に対峙し、徹底した帝国主義・植民地主義批判を展開した彼の哲学は、彼を終生師と仰いだ魯迅、毛沢東等に大きな影響を与えた。



青233-1  
岩波文庫

西順藏、近藤邦康 編訳  
『章炳麟集 清末の民族革命思想』1990年、岩波文庫

# 章炳麟(一八六九 ～一九三六、号は 太炎)について：戦 後日本での受け止 め方

- 「19世紀から20世紀初めにかけて中国で民族革命を鼓吹し、孫文・黄興とならんで「革命の三尊」と呼ばれた思想家……仏教と老莊の思想にもとづいて西欧思想に対峙し、徹底した帝国主義・植民地主義批判を開いた彼の哲学は、彼を終生師と仰いだ魯迅、毛沢東等に大きな影響を与えた」

—西順蔵・近藤邦康訳『章炳麟集』  
岩波文庫カヴァー宣伝文より抜粋

東京で発行される、革命団体の同盟会機関紙『民報』:  
主筆章炳麟



# 一九〇五年十二月八日の『民報』創刊号から章 の編集した二十四号までの雑誌の六大「主義」

- ・「本社の主義は次のようである。
- ・一は現今の惡劣政府を転覆し、
- ・一は共和政体を建設する。
- ・一は世界の平和を維持し、
- ・一は土地を国有する。
- ・一は中国日本兩国の国民の連合を主張し、
- ・一は世界列国が中国の革新事業を賛成する。」

# 『民報』時期(1906.6–1908.10)における章炳麟のアジア連帯: 亞洲和親会

- 一九〇七年四月に章炳麟が起草した「亞州和親会規約」
- 章炳麟は日本、印度の活動家とともに一九〇七年四月に東京青山で亞洲和親会を成立させた。亞洲和親会という名前の英訳はAsiatic Humanitarian Brotherhoodである。初期社会主義者の竹内善朔(1885–1951)は1948年に、「Humanitarian Brotherhoodと云う語に千鈞の重みがあった」と回想した。
- 竹内によれば、この規約は、中国語と英語の両面印刷であり、英文は「印度同志」の「起草」により、中国語と主旨が同じだということである。

# 亞洲和親会：日中などの参加者

- 中国側に章炳麟以外に、張繼(1882-1947)、劉師培(1884-1919)、何震(殷震)などがあり、参加者陶冶公(1886-1962)の回憶によれば、ほかに文学者の蘇曼殊(1884-1918)、のちの中国共産党初代書記長となった陳獨秀(1879-1942)、呂劍秋(復)、羅黑子(象陶)などの数十人いた。
- 竹内善朔の追憶によれば、初回は中国、印度、日本の参加者しなかない。日本の参加者に堺利彦、大杉栄、後の日本共産黨創立者の一人である山川均、守田有秋(1882-1954)、竹内本人がいた(幸徳秋水は欠席であった)。二回目の参加者に中国、印度、日本の活動家の外に、ベトナム、フィリピンの革命党が参加し、「不幸にして朝鮮の人々は一人もいなかった」(竹内回憶)。

# 「亞州和親会規約」抜粋

- むかし天山（西北にある天山山脈にの南北地域）の三十六国（漢代にあった）は、トルコ、ウイグルに攻撃され、その種族は全滅した。将来、中国、インド、ヴェトナム、ビルマ、フィリピンの諸国が三十六国の後を追うことがないとはいえない。われらはこの事實にかんがみ、亞州和親会を創建して、帝国主義に反対し自らわが民族を守る。（西順蔵、近藤邦康 編訳『章炳麟集 清末の民族革命思想』1990年、岩波文庫、347頁）
- わが親密なる種族は、数が多く、まだ全部結集していないため、まずインド、中国の二国を以て会を組織する。思うに東方の古国ではこの二国が大きく、二国が幸いにして独立を得ればアジア州を守る城壁となることができ、十数の隣国もこれによって侵略を受けないようになる。故にまず最初にこの二国で会を創設するのである。一切のアジア州民族で独立主義を有する者は、共に盟約を結ぶため、どうかおいでいただきたい。われらは香をたいて祈り、お迎えするものである。（同、348頁）

- ・章炳麟の亞洲和親会におけるアジア連合の構想は、ピラミッド型の権力的階級・階層がなく、反帝という理念での平等と連合を強調し、これは「規約」において、「会の中に会長、幹事の職は無く、各会員にみな平等の権利がある。(中略)どこの国から來た会員であるかを問わず、すべて平等親睦を第一とする。」(同、350頁)とある通りである。そして、反帝の理念については、章炳麟が和親会の宗旨は「帝国主義に反抗し、アジア洲のすでに主權を失った民族におののおのの独立を得させることにある」と明確に表示している。

# 章炳麟の「進化論」に対するユニークな批判とその背景

「俱分進化論」(『民報』七号、一九〇六年九月に掲載)

日本語訳者解題: 人類が完全美・純粹善に向かって無限に進化すると説く西洋の進化論に対抗して、仏教に依拠して、人の我執により善と惡、苦と樂が並進すると説き、この惡・苦の世から衆生を解脱させるよう主張する。(同、101頁)

# 「俱分進化論」(1906年9月)書き出し

- 
- ・近世の進化論者は、おそらくヘーゲル氏(一七七〇一一八三一)にはじまる。進化という明確な言葉はないが、「世界の発展は理性の発展である」という表現の中に、すでに進化の説の萌芽がある。ダーウィン(一八〇九一八二)、スペンサー(一八二〇一九〇三)らはその説を応用し、前者は生物現象によって、後者は社会現象によってそれを論証した。かれらが固執したのは、終局目的は必ず完全美・純粹善の領域に到達することであり、そこではじめて進化論が成立した。(西、近藤 訳『章炳麟集』、101頁)

# ヘーゲルに関する豆知識

- ヘーゲルの弁証法とは、正(thesis)→反antithesis→合 synthesisという無限に螺旋状的に発展する三段論を矛盾の発展として捉え、この矛盾の運動こそ、現実世界の万物の本質とした。矛盾が悟性の制限を否定=Aufheben (止揚・揚棄)することを弁証法と規定した。
- 止揚:取り消すこと、高めること、保存することの三つの意味を同時に含有する。
- ヘーゲルの哲学はすべてその論理学に集約した。
- ヘーゲルはその『歴史哲学』に、東洋では一人が自由、ギリシャ・ローマでは数人が自由、キリスト教では万人が自由、という自由の理念の自己展開としての、西洋中心的な世界史像を構築した。そして「自由」という理念に「進歩」という理念を重ね合わせながら停滞したアジアという「歴史的幼年」に対比する、精神的世界で発展する「大人」の西洋像とを対照させた。

## スペンサーHerbert Spencer 1820-1903の社会進化論に関する豆知識(『岩波 哲学・思想事典』を参照)

- 社会の歴史的変動を生物進化との類比によって説明しようとする理論のこと。19世紀の後半、イギリスのスペンサーによって提唱された。
- 彼は進化を物質が不確定的で非凝集な同質状態から確定的で凝集的な異質状態へと移行する過程として捉え、この変化の**法則性**は天体に始まり、地球から生命と心の有機体を経て超有機体の社会にも等しく及ぶ普遍性をもつものとした。(廣松涉 他『岩波 哲学・思想事典』1998年、岩波書店、693頁)

# スペンサーの社会進化論に関する豆知識(『岩波 哲学・思想事典』を参考)

- スペンサーは、社会は「軍事型社会から産業型社会へ」発展するものと考えた。前者においては全体の目的のために個人は存在し、個人の自由は抑圧されて強制的な協力が支配するのに対して、後者においては逆に社会成員のために存在し、市場取引に不可欠な同等な個人的自由が保証され、自発的協力が支配する。こうして進化の法則の自然性を説くスペンサーは、近代資本主義社会を「平等な自由の法則」の実現態として捉え、これに対する国家の干渉を排する熱烈なレッセ・フェール主義者としてイギリス産業主義を代表するイデオローグとなる。(同、693頁)
- 他方また自然選択に基づく適者生存こそ進化の原理に適うものとして弱肉強食型の社会をある意味で理想視することによって、社会ダーウィニズムの祖ともなった。(同、693頁)

# スペンサーとダーウィン(Charles Darwin 1809-1882) (『岩波 哲学・思想事典』を参照)

- スペンサーの思想の基本は、科学による知の総合を目指す実証主義的なものである。その際に彼は生物学から学んだ進化という概念に向かった。この着想はダーウィンの『種の起源』に先立っており、「進化」の語の使用もまずはスペンサーによる。(同、884頁)
- 社会論においては、社会が構成員個々の個性を益々生かしつつ、同時に「適者生存」のメカニズムによって、全体として、よりよき共働の状態へと自ずから進んでいること。それゆえ、その過程に例えれば政府が人為的に介入してはならず「自由放任」を旨とすべきことが主張された。(同、884頁)
- 林:明治日本と清末中国への影響が大きい。ベトナム・朝鮮半島などのほかの東アジア知識人への大きな影響も十分想像される。
- 林:世界的な「進化教」でもある。西洋の啓蒙思想の影響:歴史の進歩を科学の進歩と同一させる立場。

# 章炳麟「俱分進化論」(1906年9月)引用

- しかし、わたちは進化の説がまちがいだとはいわない。  
(中略)だがもしも進化の終極が必ず完善美・純粹善の領域に到達することができるというならば、任意に一事をあげれば、必ず口をとがらせて反論することができる。進化の進化たるゆえんは一方の直進によるのでなく、必ず双方の並進による、ということがかれらに分かっていないのだ。もっぱら一方だけをあげるのは、ただ知識が進化するだけならばよい。もし道徳についていえば、善も進化し惡も進化する。もし生計についていえば、楽も進化し苦も進化する。(西、近藤 訳『章炳麟集』、102-103頁)

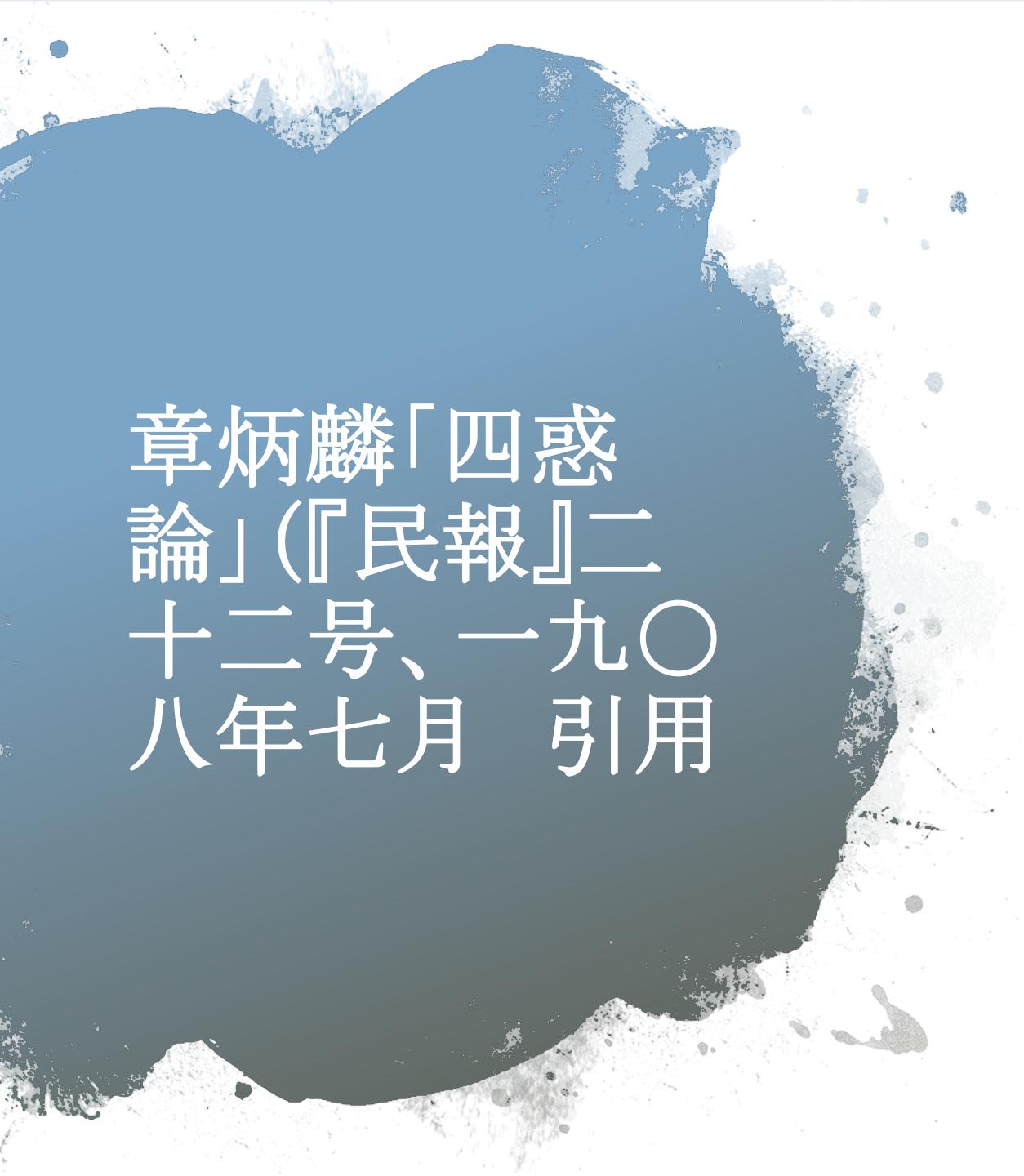
- ここに「進化の終極が必ず完全美・純粹善の領域に到達する」と言っているのは、哲学でいう「目的論」的な考え方である。
- 目的論とは、事物や事態、ないし歴史の発展を目的という観念にしたがって説明することである。「すべての事象はならかの目的によって規定され、その目的に向かって生成変化しているとする立場」(『デジタル大辞泉』)
- 章炳麟は進化論の目的論的性質を批判しようとした。
- 善と悪、苦と楽の双方の必然的な並進を説くことで、進化論の楽観的な構図を否定した。  
(我々の現実にある例で説明しよう)

# 章炳麟「四惑論」(『民報』二十二号、一九〇八年七月)

- 章炳麟は進化を四つの「惑」の一つとしている。「西洋の神教に基づき、多数者・強者・知者の少数派・弱者・愚者に対する圧迫・束縛を正当化し、人を物に隸属させる四惑だとして批判し、これに対抗して無神論・莊子齊物論・仏教唯識論にもとづいて個人の自主を立てる」(日本語訳者解題の言葉) (西、近藤 訳『章炳麟集』、371頁)
- 四惑: 1) 公理、2) 進化、3) 唯物<物質中心主義+因果律に基づく科学主義>、
- 4) 自然: 「物に自性があることを求那(ぐな) + 自性によって作用を成すことを羯磨(かつま、業、はたらき) = 自然。」(「四惑論」)。

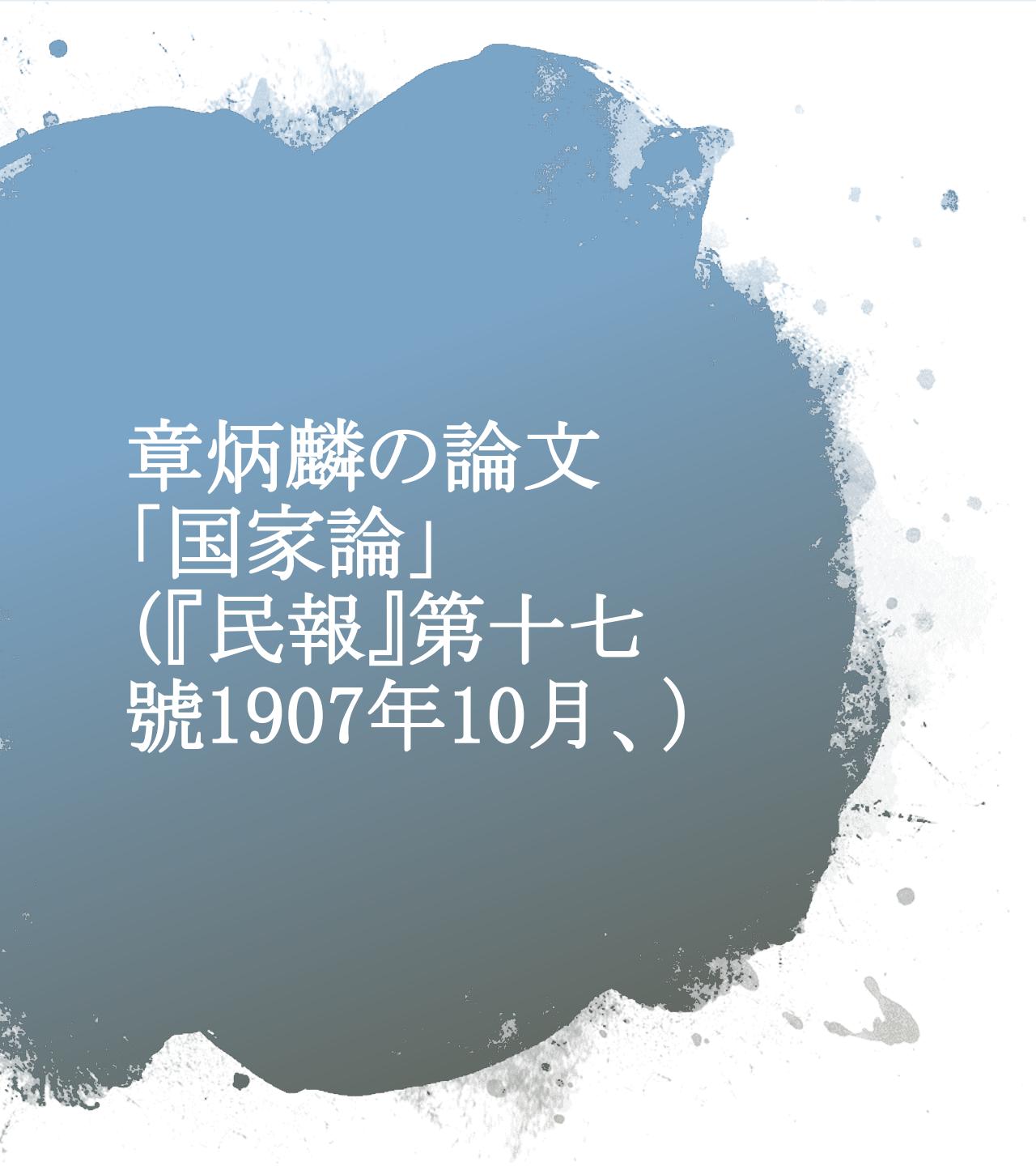
# 個人の自由を主張する

- 「其の斎しからざるを斎しくするのは下士の鄙執であって、斎しからざるを斎しいとするのは、上哲の玄談である」(章炳麟『斎物論釈』初定本一九一〇年)
- 群衆、社会、国家、「自然法則」などの「公理」で個人を抑圧することは断固反対する。
- 「四惑論」(一九〇九年)において「人類は世界のために生まれたのではなく、社会のためにうまれたのではなく、国家のために生まれたのではなく、相互に他人のために生まれたのではない」と。(同、378頁)



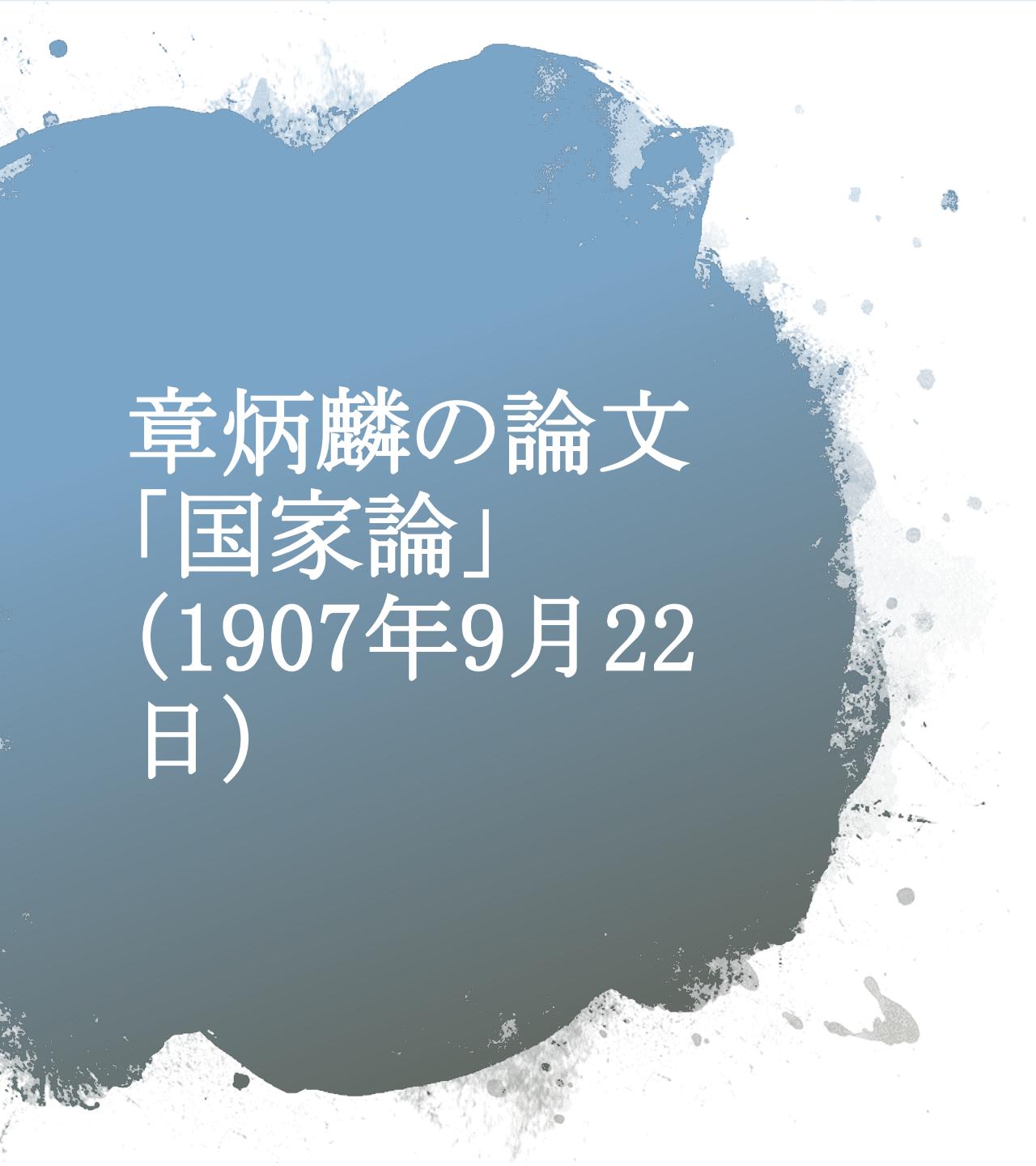
# 章炳麟「四惑論」(『民報』二十二号、一九〇八年七月 引用)

- 莊周のいう斎物は、正しい所、正しい味、正しい色など一定の基準があるのではなく、万物に各自好むところに従うようにさせることが、これは、まことに計算名人が計算できない程、公理の説をはるかに越えていことがある。莊周のいう「どんな物でもそうでないものはなく、どんな物でもよくない物はない」(「無物不然、無物不可」)は、ヘーゲルのいう「あらゆる事はみな合理的であり、あらゆる物はみな善美である」と言葉の意味は同じだが、前者は人心は同じでなく画一化しがたいと考え、後者は終局目的(絶対精神)は事物を実現の過程とすると考えるのであり、両者の根底ははるか遠くへだたっているのである。(同、385頁)



# 章炳麟の論文 「国家論」 (『民報』第十七 號1907年10月、)

- 日本語訳者解題「まず、個体を真とし  
団体を幻とする真理の立場から、國家  
の自性・作用・事業を否定して、國家  
論者を論破する。次に、仮の存在であ  
る人の立場に立って、他国に圧迫され  
る中国など弱国の愛国・建国・救国を  
肯定し、無政府主義に賛成せず、民族  
主義に根拠を与える。仏教・莊子がこ  
の理論的基礎となっている。」(西、近藤  
訳『章炳麟集』、323頁)



# 章炳麟の論文 「国家論」 (1907年9月22 日)

- 「一、国家の自性〔固有・不変の本体〕は仮有(けう)〔因縁により現象としてかりに存在〕であって、実有(じつう)〔真実に存在〕ではない。
- 二、国家の作用は勢いやむをえず設けたのであって、道理の当然として設けたのではない。
- 三、国家の事業はもっとも卑賤なものであって、神聖なものではない。(同、324頁)



# 章炳麟の論文 「国家論」1907 年9月 引用

- あらゆる個体は、みな多くの物の集合であって実有ではないが、しかし個体の集合体に対しては、個体はしばらく実有ということができ、集合体は仮有といえる。国家は人民から構成される以上、おのれの人民はしばらく実有といえるが、国家は実有とはいってきれない。ただ国家だけでなく、一村落・一集市も、ただ各人が自性を実有し、村落・集市は自性を実有しない。要するに、個体は真であり、団体は幻である。(同、325頁)

# 章炳麟の論文 「国家論」(1907 年9月22日)引 用

- ・「近代の国家学者は「国家は主体であり、人民は客体である」という。(中略)国家が主体というのは、ただ言葉があるだけで、もとより実際のものがないことが分る」(同、326-327頁)
- ・同時にこの論文で章炳麟が「国家が実であるから、主体と名づける」ことを疑問視し、「人を離れた外に別に主体があるなどとどうしていえようか」と批判する。(同、328頁)
- ・すなわち個体にこそ「主体」があると強調する。

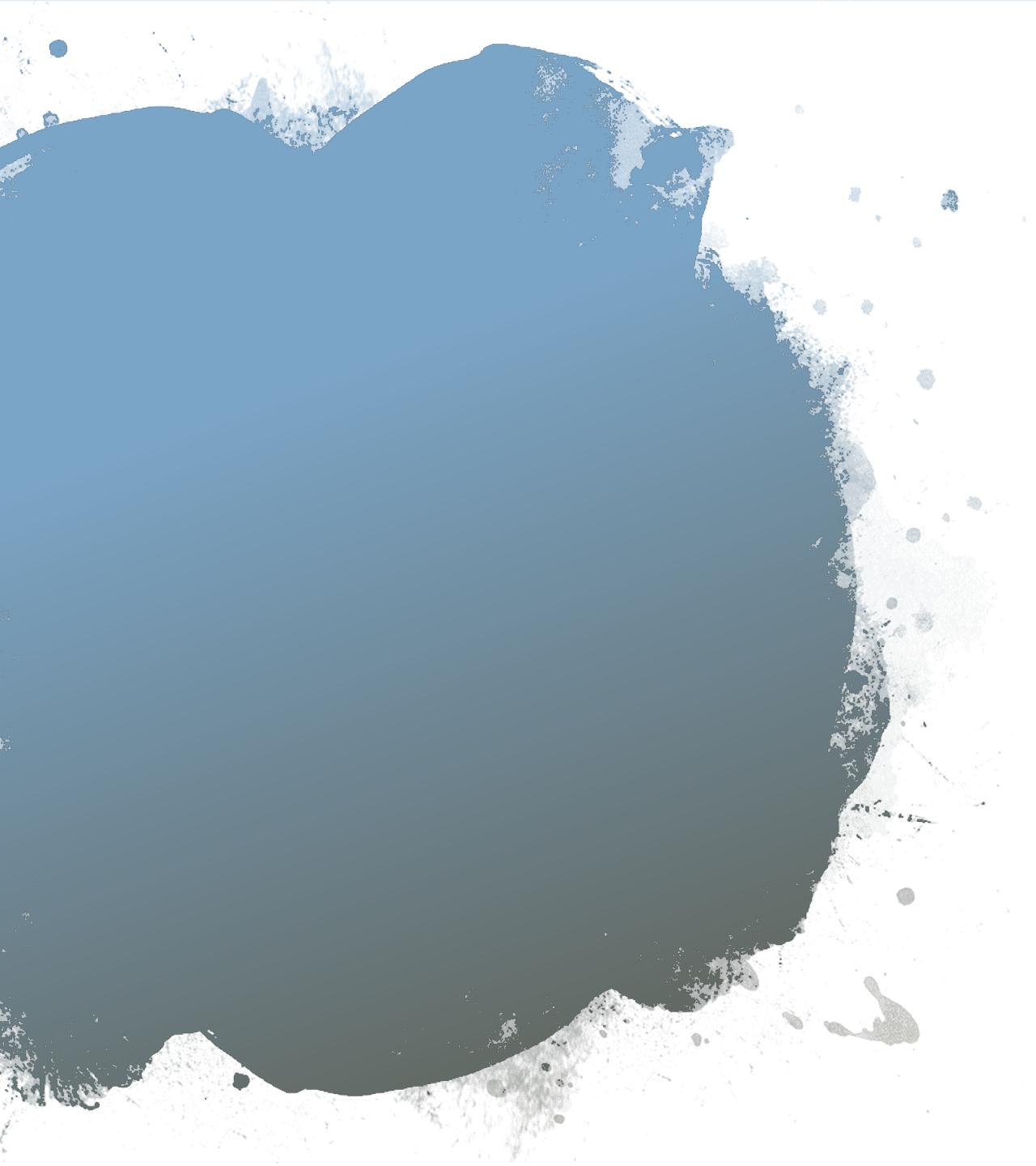
# 章炳麟の論文 「国家論」(1907 年9月22日)引 用

- 「國家をはじめて設けたのは、本来外を禦ぐためなのである。それ故、古文(秦以前の字体)では「國」の字は「或」に作り、戈で一(地)を守る形である。昔の民が願ったのは、これだけであった。軍事と国事が次第に区別され、そこから政治が起った。法律で民を治めるのは、無為にして化するのに及ばない。上に官僚がいれば、勢力が相互に牽制しあってやむことがない。もし外患がなければ、どうして国家の必要があろうか」(同、330-331頁)

# 章炳麟の論文 「国家論」(1907 年9月22日)

- ・「強盛の地にいて愛国をいう者は、ふくろうやみみづくのように、ただ他人を侵略して名誉を飾るから、かれらの愛国に反対するのは当然である。だが、中国、インド、ヴェトナム、朝鮮の諸国は、とくに他人が我を消滅し、蹂躪したので、固有の自己を回復しようと思うのであり、それ以外に他人に害を加えたことはない。これらの諸国のいう愛国には、反対すべきではない。愛國の念は、強国の民には有ってはならず、弱国の民には無ければならない。やはり、自尊の念が貴顕の者には有ってはならず、貧窮の者には無ければならないのと同様である。要するに、自ら均衡を保つだけである。」(同、339-340頁)

- 章炳麟は1907年の論文「五無論」において佛教と莊子思想を独自に融合した政治哲学から、「民族主義を超越するもの」として、無政府、無聚落、無人類、無眾生、無世界という「五無主義」を主張した。そのなかで彼は印度などの国とその関連にある「民族主義」を次のように再定義した。
- 「国家に執着する以上、民族主義に執着せざるをえない。しかし民族主義の中には広大なものがある。われわれが執着する対象は、漢族だけに限るのではない。その他の弱民族で、他の強民族に征服されて、その政権をぬすまれ、その人民を奴隸にされたものがいれば、もし余力があれば、必ず救って回復すべきである。ああ、インドとビルマはイギリスに滅ぼされ、ヴェトナムはフランスに滅ぼされて、弁舌・知恵のすぐれた温厚な種族が完全に滅亡した。それ故、わが種族は回復すべきであるが、わが種族でなくとも、聖哲を生んだ古い国の遺民が奴隸に身をおとしていることに耐えられようか。民族主義を完璧なものにしようとすれば、わが真心をおしひろげて、あの同病の種族を救い、完全独立の地位に立たせるべきである。」(同、271-272頁)

- 
- 章炳麟の民族主義には、専制制度下にある本国の人民と、弱い国の人民に対する深い同情がある。彼のアジア連帶の思想は国際主義色彩のある「民族主義」である。
  - 彼から見れば、「完璧」な「民族主義」とは、「民族主義をものにしようとなれば、わが真心をおしひろげて、あの同病の種族を救い、完全独立の地位に立たせるべきである」。
  - 言い換えれば、「完璧な民族主義」とは、弱いものに対する同情に基づく国際主義でなければならない。

# 差異の尊重こそ眞の普遍性であるという章炳麟の莊子論:『齊物論釈』1910

- これが彼が莊子に依拠しながら解釈した「齊しからざるを以て齊しとする」の意味である(「以不齊為齊」,『齊物論釈』1910)。

# 章太炎『齊物論釈』1910

- ・『齊物論釋』において「齊しくないのを齊しくするのは、下士の下手な執拗であるが、齊しくないのを齊しいとするのは、上哲の玄談である」と述べている。
- ・「齊しくないのを齊しくする」とは、まさに均質的な近代の「公理」や、進化論などを新しい普遍性とすることに逆行するものである。
- ・それに対して「齊しからざるを以て齊しとする」こそ、不二の普遍性である、とでも言っている。言い換えれば、差異性の尊重こそ、普遍性である、と理解できる。

# 「自主」と「主権」のための実践としての革命： 章炳麟政治思想における「個人」

- 章炳麟の言う「アジア自主」とは、アジア民衆の「自主」でもある。「自主」と「主体」は章炳麟政治思想の重要なキーワードの二つである。彼のいう「主体」とは、国家と団体が幻想であるという命題で、個人にのみ属すものと見た。
- そうであるがゆえに「主権」もしかたがって、ウェストファリア条約以来の、「国家」に属すようなものの「主権」では決してなくなる。むしろ個人のレベルにおいてしか「主権」なるものを見ない、と理解するべきである。章炳麟は国家や団体に解消できない個人個人の主権を求めようとした。

## 「五無論」(『民報』十六号、一九〇七年九月に掲載)

- 引用:概観すると、今日のいわゆる文明国は、桀・紂以上にひどく他の大陸の異なる色の人種を殺戮する。桀・紂はただ一人でやったが、いまは官吏と人民の全体でやる。桀・紂は美名で飾らなかつたが、今は学術の名によって飾る。(西、近藤 訳『章炳麟集』、292頁)
- 「学術」=社会進化論とそれが基づいている哲学。
- 章炳麟の意図の一つは帝国主義、植民地主義を粉飾する文明論、進化論を俎上に置いている。

# 章炳麟の議論 の110年後の 我々の回顧

- 羽田正が指摘したように、「国同士が戦い始めれば両国の「国民」も戦わねばならないと即断するのは、現代人の性である。国民国家が生まれる前のヨーロッパでの戦争は、職業軍人と傭兵からなる国の軍隊同士の戦いであって、それぞれの国王の領域に住む人々すべてに関わる事件ではなかった。(中略)「国民皆兵」の原則ができるのは、一九世紀に国民国家が成立して以後のことである」。  
(羽田正(著)『興亡の世界史 東インド会社とアジアの海』2007年、講談社、296頁)

- 章炳麟は「五無論」において荀子の性悪論による礼法思想を批判する。というのは礼法も悪人である官吏・悪である国家によって維持する以上、自己矛盾だと考えているからである。

# 「五無論」(1907年9月)引用

- ・「荀子の時代は見る範囲は中国だけであり、戦国の七雄<秦・楚・燕・齊・韓・魏・趙>が争い、民は草やあくたのように軽視されたが、それでもまだ近年の帝国主義ほどひどくはなかつたので、世俗にしたがつて正しく教え、政府を建設することを当然だとした。だが、かれ自身の言葉の中にはなはだしい矛盾がある。なぜならば、人の性が悪である以上、政府もやはり人から成るから、どうして政府の性だけが悪いことがあろうか。」(西、近藤 訳『章炳麟集』、292-293頁)

- ただ誤解してならないのは章炳麟こそ荀子よりも「性悪論」主張者である。その考えはまず国家・政府の性悪論に拡大することのみならず、それを仏教的に人間こそ万物の惡の起源そのものであると主張したことである。

# 「五無論」 (1907年9月)引用

- 有形の物はみな自分を守って他者を防ぎ、同一の場所を二つの物が占めることはなく、微塵やかけろうも互いに相容れない。無形の分別心(対象を思惟・計量する心)でも、一刹那に二つの想念と一緒に起こすことはできない。これはみな、異物を排斥し相互に殺害することを証明する事例である。一切の法我(ほうが)(対象に固定的実体があるとして執着)・人我(わが身の内に常一主宰の我があるとして執着)は、法爾(ほうに)(自然)に殺によって生ずる。殺がなければ、三界(凡夫が生死往来する欲界・色界・無色界)はおのずから断絶する。ここから推論すれば、人が万物の根本惡であることが必ず分る。いま天性を基準として、淫は人道であるというならば、殺もやはり人道ではないか。(同、298-299頁)

# 章炳麟の議論 の110年後の 我々の回顧

- 昔の基準での遠隔空間も人類の大量殺傷武器の進化などによって益々近距離化されるようになる。
- 現在の人類が面しているのは、むしろ空間そのものが今日のテクノロジーの発展によって大きく変えられたことの怖さ、である。
- 第一次世界大戦と第二次世界大戦とのテクノロジー上の違いによる殺人効率の違い。
- 今まで人類の経験してきたすべての時代よりもテクノロジーこそ軍事力そのものを意味してしまうという怖さ。

# 「五無論」 (1907年9月)引用:

- 引用:無政府は一般人が殺しあうことはあっても、その残酷さは有政府よりはましである。(同、293-294頁)
- 解説:国民主義・国家主義を批判する一方、無政府主義を批判する無政府主義者である章炳麟。
- 引用:ヘーゲルの説の「有」、「無」、「成」の意義を剽窃して、宇宙の目的は「成」にあるから、その目的に合うものは正しい、という者がいるかもしれない。(同、295-296頁)
- 解説:ヘーゲル弁証法(正一反一合とその終局目的に向かう発展論)とそれに基づく進化論を章炳麟が批判。

# 章炳麟の議論 の110年後の 我々の回顧

- 侵略であれ、自衛であれ、国家が可能なる対外的戦争のために存立されるものもある。そして、対内支配をより有効にし人民を支配者の意のままにまとめるためには、民主主義的国家であれそうでなかれ、常に対外的な仮想敵——多くの場合——でっち上げの「敵」ではあるが——が必要とする。
- 国家の間の「民主主義」はこの世にまだ生まれていない。国家中心である以上、そのようなことが難しい。
- 軍備競争は原理的に必然的に悪循環するものである。財政負担が人民に回るしかない。
- 対照：人類学者の研究によって明らかにされたのは、比較的小さな、国家のない諸社会の成員たちの間における組織的な武力紛争や、部族対部族とか村対村の組織された戦闘があまりない(Gerald C. Wheeler, 1963; G. P. Murdock, 1934)

# 章炳麟の議論 の110年後の 我々の「30年後 の世界」の想像

- 「進化」により環境破壊の問題。地球環境がグローバルな資本主義の発展において毎日のように破壊されつつある今日。
- パンドラの箱はいつ開けたのか。
- 約110年前における清末の思想家の章炳麟の憂鬱な予感は現在われわれの現実になりつつある。
- 「近代」／「進化」の謳歌に対する章炳麟の批判はわれわれの「30年後の世界」の想像にどのような示唆を与えているのか。